

1. た・づ・な

「日高育成牧場に就任して」

日本中央競馬会
日高育成牧場
場長

高松 勝憲



本稿を進める前に、このたびの東日本大震災で被害を受けられた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

JRAといたしましても「がんばろう日本！～サラブレッドから元気を～」をスローガンとして、今後も引き続き支援をさせていただくつもりです。

さて私は、本年3月の異動で日高育成牧場の場長として着任しました高松と申します。朝井前場長同様に、よろしくご指導をお願いします。

日高育成牧場で勤務するのは11年振りとなります。初めての勤務は、まだ年号が昭和の時代でした。2度目の日高は平成9年、旧日高育成牧場で最後の育成馬を送り出し、その後、現在の施設に移って最初の育成を行いました。

今回で3回目の日高勤務となりますが、近年、日高育成牧場は様々な変遷を経てきました。育成業務も、それまでの「抽せん馬の配付」を主体としたものから、「強い馬づくりを推進するための育成技術の向上」に向けた調査研究が強く打ち出されるようになりました。このことに関しては、平成17年に初めてのブリーズアップセールを開催した際に、「JRAは、育成研究を行い、その成果を強い馬づくりにフィードバックすることを目的として、育成業務を行ってきております。」と挨拶があったことからもお分かりになると思います。

平成10年10月には生産育成研究室が併設され、それまでの競走馬の育成期における調査研究に加え、生産までを含めた調査研究が行われるようになりました。

生産育成研究室では、当初は運動生理・栄養についての研究が主体でした。適切な運動と栄養は、競走馬の走能力を向上させるための、さながら両輪といえるものです。有酸素運動能力に関する研究や飼料の栄養素の研究がなされ、当時の成果として、前者ではV200（心拍数が200拍/分の時のスピード）を用いた調教進度の判定を育成馬にも導入しました。後者では発育に必要な養分要求量が導かれるとともに、急速な発育の危険性が提示されました。また、適正な飼料給与を行うためのボディコンディションスコアの導入が唱えられました。これらは「軽種馬飼養標準」としてまとめられています。

また、平成11年には繁殖牝馬を導入し、交配から出産、産駒の成長期も調査研究の対象となってきました。この期間の研究としては「子宮の回復状況に着目した交配適宜」や「胎子の健康診断」、また「簡便な分娩予知法」、「産駒の至適放牧環境」、「若馬の発育期の運動障害」などがあります。例えば、放牧地における安全対策（牧柵の工夫など）により、北海道においても哺乳期からの昼夜放牧が問題なく実施できることが証明されました。

これらの研究は、従来から行われている、育成期の若馬に対する調査研究に連動しています。こ

れまでの研究成果は「JRA育成牧場管理指針：生産編」としてわかりやすくまとめてありますので、既に発表している「JRA育成牧場管理指針：日常管理と馴致」と併せてご利用いただければ幸いです。

さて、皆さんがこの稿をお読みになっているころは、すでに結果が出ているのですが、本年のブリーズアップセールには日高育成牧場で生産しました馬を始めて出場させます。牡6頭、牝1頭の全7頭を予定していますが、今後の成長により頭数は変わることになります。父親はすべてデビッドジュニアです。ブリーズアップセールは、生産・育成に関する調査研究を行ったことを、競走裏での成果検証を行うための、大切な要素のひとつと考えております。これらの馬がセール後、競馬に出走しますと、世界でも例のない「交配、妊娠、分娩、育成前・中・後期、競走」の一貫した調査研究を行えることとなります。今後も、この生産馬を競馬に出走させることを続けて行き、そこで得た研究成果を、まとめ次第順次、皆さんにご披露します。是非ご活用ください。また、日高育成牧場の主催あるいは共催による各種の講習会や研修会を通して、研究成果をご披露させていただきます。

このように日高育成牧場も、その業務の性格を少しずつ変えてきているのですが、性格を変えずに続けていくものもあります。例えば、日高育成総合施設軽種馬調教場（皆さんがBTCと呼んでいるもの）は、本年より軽種馬育成調教センター（本来BTCと呼ばれるもの）に運営を委託しますが、これまで同様に皆さんにご利用いただけるよう、より良い運営を目指し、BTCを支援していきますのでよろしくお願いいたします。また、馬産地ならではの特色を生かした馬事振興と乗馬普及や、育成調教技術者養成の支援も今まで同様に行ってまいります。

どうぞこれからも日高育成牧場をよろしくお願いいたします。